

加群が最善であり、里親と通常施設では差は見られないことになる。当初のわれわれは、問題行動も里親が最小となるあるいは減少が大きいと仮説していたが、それは支持されなかった。

しかしここでも、アタッチメントの項で示したと同じように当研究に限界がある。たとえば CBCL を記載者にも、施設職員と里母という専門性の差異があり、このことが比較を困難にしている可能性があるなどである。

いずれにしろ、本研究の特徴は、比較的容易に用いることのできる質問紙を方法として使用したことにより、この質問紙の臨床応用をしている点で強みがあるが、一方直接の児童および児童－養育者の関係性をアタッチメントを含め測定していないことから上記に述べた大きな限界を生じた。当研究はあくまで予備的な3環境の比較であると考えるべきであろう。

E. 今後について

上記限界で述べたごとく、今後直接的な行動観察を含む里親環境を施設環境の本邦での調査が期待される。

またわれわれの一連の研究についていえば、本研究に示した対象群すなわち、Community sample, 施設通常養育、施設通常養育に AP を付加した群、里親養育それぞれについて、アタッチメントの適応度と問題行動との関連、AP の有効性、里親養育ではアタッチメントの適応性を高める因子、などについて詳しく分析を進めてゆく計画である。

文献

AACAP official action (2005).Practice

parameters for the assessment and treatment of children and adolescents with reactive attachment disorder of infancy and early childhood, J. Am.Acad.Child Adolesc.Psychiatry, 44, 1206-1219.

Achenbach TM. (2000) : The Child Behavior Checklist and related forms for assessing behavioral/emotional problems and competencies. Pediatrics in Review, 21, 265-271

児童思春期精神保健研究会誌,2002.

青木豊 (2008) 被虐待乳幼児に対するトラウマ治療と愛着治療, 日本トラウマティック・ストレス学会誌, 6, 15-23.

青木豊ら (2008) 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業) 児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究 pp647-664.

青木豊ら (2007) 平成 18 年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業) 児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究 pp651-680.

青木豊ら (2006) 平成 17 年度厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業) 児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究 pp425-442.

青木豊ら (2008) 平成 17-19 年度総合研究報告、厚生労働科学研究費補助金(子ども家庭総合研究事業) 児童虐待等の子どもの被害、及び子どもの問題行動の予防・介入・ケアに関する研究 pp475-484.

青木豊・庄司順一・鈴木浩之・加藤芳明・平部正樹・安部伸吾・松尾真規子(2009) : 分離後の被虐待乳幼児の2つの処遇; 明治安田こころの健康財団研究助成論文集, 通

巻 44 2008 年度 ; 1-13.

Berlin, L., Zeanah, C., & Lieberman, A.

(2008) Prevention and Intervention Programs for Supporting Early Attachment Security. J. Cassidy & P. Shaver (Eds.) Handbook of Attachment, 2nd Edition. (pp. 745-761.) The Guilford Press, New York, London.

Cicchetti, D., & Toth, S. (1995): Child Maltreatment and attachment organization. Goldberg & Kerr (Eds.): *Attachment Theory: Social, developmental, and Clinical perspectives*. (pp. 279-308). Hillsdale, NJ. Analytic Press.

Cramer, B. (1987) : Objective and subjective aspects of parent-infant relations: An attempt at correlation between infant studies and clinical work. In Osofsky (ed.) : Handbook of infant Development (pp. 1037-1057). New York: Wiley.

Dozier, M., & Rutter, M. (2008) Challenges to the Development of Attachment Relationships Faced by Young Children in Foster and Adoptive Care. J. Cassidy & P. Shaver (Eds.) Handbook of Attachment, 2nd Edition. (pp. 698-717.) The Guilford Press, New York, London.

厚生労働省編 (2009) 厚生労働白書, ぎょうせい

Marvin R., Cooper, G., Hoffman, K., et al. (2002): The circle of security project: attachment-based intervention with caregiver-preschool child dyads. *Attachment and Human Development*, 4, 107-124

御園生直美 (2008) 里親養育とアタッチメ

ント, 子どもの虐待とネグレクト, 10, 307-315.

Provence, S., & Lipton, R. (1962). Infants Reared in Institutions. New York: International University Press.

Rushton, A., & Minnis, H. (2008) Residential and Foster Family Care. M Rutter, D Bishop, D Pine et al. (Eds) Rutter's Child and Adolescent Psychiatry, 5th Edition. (pp. 487-501.) Blackwell Publishing

Sameroff, A & Fiese, B (2000)., Model of development and developmental risk, In C. Zeanah (ed.) Handbook of Infant Mental Health, the 2nd ed. Guilford, 3-19.

庄司順一 (2008) 子どもに対する母親の結びつき, 子どもの虐待とネグレクト, 10, 315-321.

Skeels, H. (1966). Adult status of children with contrasting early life experiences. Monographs of the Society for Research in Child Development, 31 (Serial no. 105)

山縣文治と林浩康 (2007) 社会的用語の現状と近未来, 明石書店

Zeanah, C. H. & Benoit, D. (1995). Clinical applications of a parent perception interview in infant mental health. *Infant Psychiatry*, 4, 539-554.

（主任研究者 奥山眞紀子）

分担研究報告書

反抗挑戦性障害・行為障害の標準的診療に関する研究

分担研究者	原田 謙	信州大学医学部附属病院	子どものこころ診療部
研究協力者	今井 淳子	信州大学医学部附属病院	子どものこころ診療部
	疋田 祥子	信州大学医学部附属病院	子どものこころ診療部
	大西 智美	信州大学医学部附属病院	子どものこころ診療部
	板橋 真理子	信州大学医学部附属病院	子どものこころ診療部
	福島 佐知恵	信州大学医学部附属病院	子どものこころ診療部

研究要旨

【方法】 平成 21 年度は、以下の 3 点について研究を行った。1. アンケート調査を集計し、子どものこころの診療における反抗挑戦性障害（ODD）、行為障害（CD）治療の現状を把握する。2. CD 診療に関して先進的な施設を選び、診療の実際について視察を行う。3. 文献、国内の診療の実態、パイロットスタディで浮かび上がった問題点、視察結果などを踏まえた上で、標準的治療のひな形を作り臨床例に適応する。

【結果】 <アンケート> 1. 初診患者は年間 2 人以下と少数であるが、治療継続は困難で、特に CD では 6 割以上が 1 年後には治療中断していた。2. ODD の 56%、CD の 75% に発達障害が併存していた。3. ODD の 17%、CD の 6% に被虐待児が含まれていた。4. 治療は認知行動療法、親訓練法、薬物療法があがったが、精神療法を選択している医師も少なかった。5. 児童相談所をはじめとする福祉機関や教育機関との連携も行われていた。

<施設視察> 事情により、施設視察の代わりに ODD・CD 診療に関して先進的なワシントン大学が制作した DVD を購入し、ペアレントトレーニング（PT）の参考とした。<標準的治療のひな形> 1. PT は、一般の発達障害児に対するプログラムに「予防的教育法」「問題行動を正す教育法」「自分自身をコントロールする教育法」を加えた。2. 社会技能訓練（SST）は、ソーシャルスキルを高めるメニューに加え、自分の気持ちに気づくことそれを表現すること、気持ちが爆発してしまったときにどうするかについてセッションを設けた。

【結論】

本年度は 1. アンケート調査を集計し、現時点での子どものこころの診療の拠点病院における ODD・CD 治療のニーズを把握した。2. 信大独自の PT プログラム、SST プログラムを作り、これを臨床例に適応した。

A. 研究目的

本研究の目的は、子どものこころの診療における反抗挑戦性障害（ODD）・行為障害（CD）診療の標準化である。

B. 研究方法

平成21年度は、以下の3点について研究を行った。

1. アンケート調査：本研究班および全国の拠点病院医師を対象にWeb上でのアンケート調査を実施した。調査項目を表1に示した。これにより、現時点での子どものこころの診療におけるODD・CD治療の現状を把握した。

2. CD診療に関して先進的な施設を選び、診療の実際について視察を予定した。

3. 文献、国内の診療の実態、パイロットスタディで浮かび上がった問題点、視察結果などを踏まえた上で、標準的治療のひな形を作り、これを臨床例に適応した。

表1 調査項目

新患者数
患者の年齢及び性別
併存障害
治療法
連携機関
1年後の予後

（倫理面への配慮）

1のアンケート調査の作成においては個人のプライバシーに配慮し、回答者である医師が記入すべき内容は、全て数値データとした。

3の標準的治療については、患者と親に研究内容について説明し書面で同意を得た。

C. 研究結果

1. アンケート調査

10名の児童精神科医、内科医、小児科医から回答を得た。集計は、各項目ごとに回答した人数で平均や割合を算出した。

・ODDの新患者

年間平均1.7（女子0.3人）

・CDの新患者

年間平均0.7人（女子0.1人）

図1 ODD患者の年齢及び性別

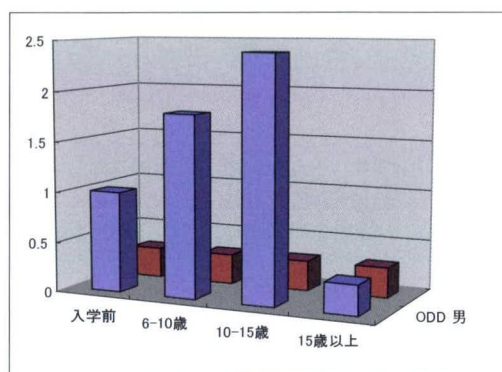


図2 CD患者の年齢及び性別

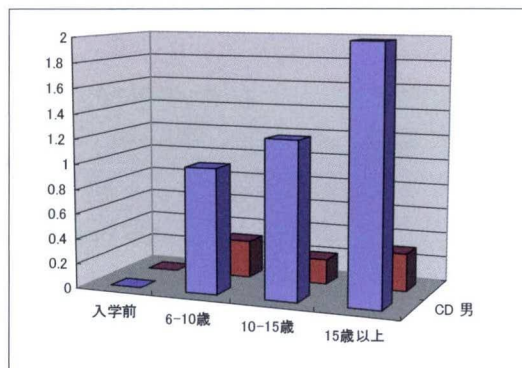


図3 ODDの1年後の予後

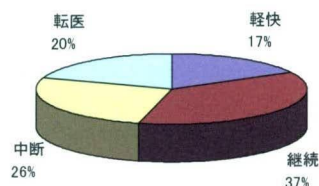


図4 CDの1年後の予後

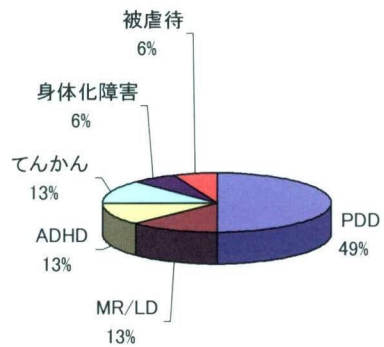


図7 ODD/CDの治療

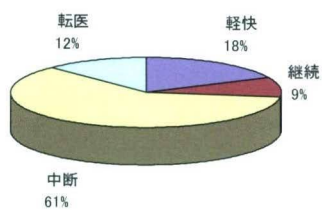


図5 ODDの併存障害

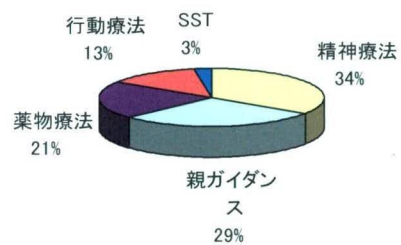


図8 ODD/CDの連携機関

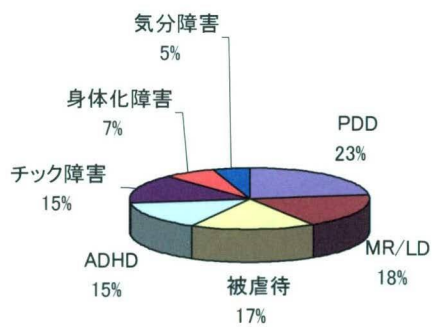
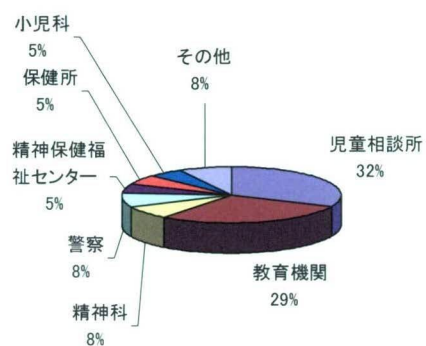


図6 CDの併存障害



- ・自由記述
- ・医療面からのサポートに限定すべきと思います。病院にケースワーカーがいてこそ諸機関との連絡調整が可能になります。こうした人材の確保がないと中心的には関わられません。

- ・年齢が低い内に（小学校低学年までが望ましい）大人との信頼関係をつくる。入院治療が有効である。明確な枠付けが必要。
- ・この疾患群は特にマルトリートメントや発達障害にからんで生じてくることが多いと考えられ、児童相談所との連携は必要であろう。

2. 施設見学

今回、ODD、CD診療に関して先進的なワシントン大学のワークショップに参加する予定であった。しかし、分担研究者の診療上の都合により渡米は中止し、同大学が制作したDVDを購入・視聴し、ペアレントトレーニング（PT）の参考にする予定である。

3. 標準的治療のひな形

文献研究からODD/CDに対する標準的治療としては、親訓練法、児自身に対する薬物療法、認知行動療法が3本柱であることが確認された。アンケート調査の結果はこれを裏付けていた。

これらを踏まえ、今年度は、児自身に対するソーシャルスキルトレーニング（SST）と親に対するPTを実施した。

<実施したSST/PTの概要>

子どものSSTとPTは並行して行った

対象：小学6年生・中学生

人数：4名（男女各2名）

期間：隔週×8回（約4ヶ月）

時間：1時間半

スタッフ：作業療法士1名、臨床心理士3名、
医師1名

回	SST プログラム
第1回	オリエンテーション／自己紹介
第2回	会話の基本
第3回	気持ちに気付く
第4回	気持ちを言葉にしよう
第5回	気持ちが爆発してしまったら
第6回	空気を読む
第7回	言い方や行動を変えてみよう

回 PT プログラム

- 自己紹介・行動を3つに分ける・上手なほめ方
- 無視する・ほめるの組み合わせ
- ポイント表の作り方・効果的な指示の出し方・親子タイム
- 警告と制限の与え方
- 予防的教育法
- 問題行動を正す教育法
- 自分自身をコントロールする教育法
- まとめと振り返り

- ・PTでは、講義の後に小グループで話し合い、ロールプレイで子どもへの声かけの仕方を練習した。

- ・合間にお茶を飲みながら、参加者同士、自由に話をした。

- ・特に後半の反抗への対処ではコモンセンスペアレンティングを取り入れて個別の問題に対処した。

D. 考察

1. アンケートから

今回のアンケートからは、初診患者こそ年間2人以下という少数であるものの、その治療継続は困難であった。とくにCD患者の6割以上が中断している現実を見ると、いかにこうした問題に取り組むことが難しいかを見て取ることができる。

今回のデータは、病院を受診したODD/CDに限定されているが、ODDの56%、CDの75%に発達障害が併存しているという点に治療のヒントがある。すなわち、ベースとなる発達障害に対するアプローチを足がかりに患児の呈している反社会的行動を理解し対処する可能性が開けてくると考えられる。

また、忘れてならないのは虐待の与える影響である。今回の調査では、診断されているだけでODDの17%、CDの6%に被虐待児が含まれていた。このことは、親子機能が破綻しているという点でも、自我発達が損なわれているという点でも、治療に抵抗する要因となっていると思われた。

治療は文献研究の通り、認知行動療法、親訓練法、薬物療法があがったが、精神療法を選択している医師も少なくなかった。ただし、いわゆる狭義の精神療法だけでこうした問題が解決すると考えている精神科医がどれだけいるかは疑問である。この問題は次年度に、エキスパートオピニオンを集めるという形で解決を図りたいと考えている。

さらに、児童相談所をはじめとする福祉機関や教育機関との連携も行われていた。この点も次年度に治療の一翼を担うものとして方向性を示していきたい。

2. 標準的治療のひな形としてのPTとSST

今年度は、前年のパイロット的なPTと

SSTを踏まえて、独自のプログラムを考案した。

PTに関しては、これまで行っていた一般の発達障害児に対するプログラムに、虐待する親へのPTである「コモンセンスペアレンティング」から、「予防的教育法」「問題行動を正す教育法」「自分自身をコントロールする教育法」を加えた。

前年の試行から『ODD/CDを持つ発達障害児はソーシャルスキルと反抗的心性の両方に難がある』事が明らかになったため、本年度のSSTプログラムは、ソーシャルスキルを高めるメニューに加え、自分の気持ちに気づくことそれを表現すること、気持ちが爆発してしまったときにどうするかについてセッションを設けた。

次年度はこれらに薬物療法を加えた統合的治療を行ったケースの治療前後の変化を定量的に扱い、その効果を判定する予定である。

E. 結論

本年度は、1. アンケート調査を集計し、子どものこころの診療におけるODD・CD治療の現状を把握した。2. ODD, CD診療に関して先進的なワシントン大学が制作したDVDを購入し、PTの参考とした。3. 信大独自のPTプログラム、SSTプログラムを作り、これを臨床例に適応した。

次年度は、21年度までに作成したプログラムを元に臨床応用例を増やし、その前後の変化を統計的に検討する。また、精神療法の効果、年長例や家庭内暴力例への介入方法、福祉教育機関との連携についてもエキスパートオピニオンを集め、ODD, CD診療の基本案をまとめたい。

F. 健康危険情報 特記事項無し

G. 研究発表

1. 論文発表

原著

1. D Sasayama, S Masutani, J Imai, Y Harada, S Washizuka, N Amano : High prevalence of pervasive developmental disorders in depressed children and adolescents. Child: care, health and development. 35: 746-747, 2009

2. Yuzuru Harada, Ayako Hayashida, Shouko Hikita, Junko Imai, Daimei Sasayama, Sari Masutani, Taku Tomita, Kazuhiko Saitoh, Shinsuke Washizuka, and Naoji Amano. Impact of behavioral/developmental disorders comorbid with conduct disorder. Psychiatry Clin. Neurosci. 63 : 762-768, 2009

総説

篠山大明, 原田 謙 : 発達障害の薬物療法. Medical Rehabilitation. 103; 18-26, 2009

2. 学会発表

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定も含む）

1. 特許取得 なし

2. 実用新案登録 なし

3. その他 なし

厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）

（主任研究者 奥山眞紀子）

分担研究報告書

診療の標準化のための情報共有基盤に関する研究

研究 1. 子どもの心の診療を標準化するために共有すべき情報収集と収集した情報を情報共有基盤で集積・分析するための情報表現に関する検討

分担研究者 本村 陽一 独立行政法人産業技術総合研究所

研究要旨

子どもの心の診療を標準化するために共有すべき情報収集と収集した情報を情報共有基盤で集積・分析するための情報表現に関する検討を行った。その結果、情報共有範囲をこれまでの診療機関と直接情報交換をはかることが困難であった児童相談所や相談員や一般市民にも対象を広げるために、現状認識に関する情報を収集し、この結果を診療機関で共有することを目的として、次の要件が必要であることを明らかにした。1)ステークホルダー分析により子どもの心の診療に関連する意志決定者の洗い出し、2)各ステークホルダーの意志決定を左右するポジティブな要因とネガティブな要因の抽出、3)心の診療に対する受療機会を増加させるための促進要因と現在存在する阻害要因の抽出。また以上の分析の結果による現状認識を共有するための記述方法としてソフトシステムズメソッド(SSM)の適用可能性を検討した。具体的には、児童相談所における実態に関する情報収集として、各地の児童相談所において、どのような業務が行われているのか、人員、業務の配分内容、および、当該児童相談所において本来行うべき業務と考えられているものと実際に行われている実態の差異や、児童相談所で処理している案件の概要と件数、他組織との連携の実態、組織の中で活動する各職員の意識などの調査を行い、その調査結果を人的ネットワークの全体像として記述した。この結果を通して、関連機関ネットワークとの連携をはかるための情報や意識の共有に貢献することができる。

A. 研究目的

子どもの心と体の健康な発達・発育において、虐待やネグレクトがもたらす悪影響が昨今クローズアップされている。警察庁、全国の児童相談所が報告する虐待・ネグレクト件数も年々増加を続け、これら事象の予防と早期発見の重要性は社会的にも認識されている。

虐待・ネグレクトの早期発見を難しくしている問題として挙げられているのが、関係する組織・機関・団体間の連携の悪さである。たとえば、保育園、幼稚園等の場所で虐待が疑われ、行政の窓口で連絡がいったものの放置されていた、あるいは、虐待が子どもの生命を脅かすレベルにまで至っているかどうかを関係機関が測りかねている間に手遅れになってしまった、といった例は報道に取り上げられているだけでも少なくない。

こうした事態に鑑み、子どもの心の健康の向上に社会的側面から寄与することを目的として、本プロジェクトでは虐待・ネグレクトの早期発見と予防に関与する組織・機関・団体間の連携の現状とその中にある問題点を明らかにすることを目的とし、2つの地域を対象に「ステークホルダー分析」を実施した。このような分析手法が子どもの心の健康の分野に応用されることは新しい試みであり、今後に向けた手法の検討と確立も目的のひとつである。

B. 研究方法

神奈川県内の2自治体を研究対象として選定し、虐待・ネグレクトの早期発見と予防に携わる10の行政機関・団体、組織を選び出した。選ばれた機関は、警察、児童相談所、母子の健康支援にかかわる行政機関、

病院、保育園等である。それぞれの機関にインタビューを依頼し、虐待・ネグレクト対応についてよく知る立場にある担当者を対象としてインタビューを行った。

インタビューは、すべての場合で同じ内容の情報を収集することができるよう、事前に骨子となる質問を用意する半構造化の手法を用いた。ただし、実際のインタビューでは、話者の話の内容によって質問の流れ等を柔軟に変え、話者が話しやすい流れとなるようにした。

インタビューで尋ねた内容の骨子は、

- 1) 話者の立場で多く扱っている虐待・ネグレクトのタイプは何か
- 2) 話者の立場から見て、同地域で虐待・ネグレクトの早期発見・予防の中心的な役割を果たしているのはどの行政機関・団体、組織か。
- 3) 話者からみて、同地域における虐待・ネグレクトの早期発見・予防の連携はどのように行われているか。連携に問題はあるか。
- 4) 話者からみて、同地域における虐待・ネグレクトの早期発見・予防の連携でもっと参加が望まれる行政機関・団体、組織は何か。

インタビュー内容を書き起こした後、各行政機関・団体、組織間の連携を図示するための表を作成した。この表を用いることで、特定の地域の中で「連携から落ちている」行政機関・団体、組織がないか、「活躍が期待されているにもかかわらず活動していない」あるいは「期待されているとは異なる働きをしている」行政機関・団体、組織がないかといった点を明らかにすることが可能になる。

C. 研究結果

今回の結果から、インタビューを行った2自治体の関係機関の間では、「近年、（数年前に比べて）連携はスムーズになってきている」という認識の一致があることが明らかになった。国が進める要保護児童対策地域協議会（要対協）の枠組みが両自治体では機能しているとの認識であった。連携を図示した表によっても、要対協の枠組みに沿って連携が進められ、行政機関・団体、組織がお互いの役割を理解しつつ協力していることが示された。

しかし一方で、虐待やネグレクトが強く疑われるにもかかわらず、子どもの保護権を持つ警察・児童相談所が介入するまでの証拠が得られず、地域の諸機関が「見守るだけ」に終わっている子どもも少なくないことが多くの話者から示された。また、児童を一時保護する施設的能力が常に足りないことも指摘され、介入の困難さが明示された。

D. 考察

本プロジェクトから、「ステークホルダー分析」の手法を用いることで、行政機関・団体、組織間の連携の現状やその問題点をある程度浮き彫りにできることが明らかになった。しかし、虐待・ネグレクトという課題自体の性質か、話者によってはインタビューに対する回答が表面的にとどまり、地域の問題点の本質にまで到達できて

いない場合があった。こうした問題点をもとに、インタビューの方式も含め手法をより改善し、地域の問題点を深く掘り下げることが可能な方法論を確立していく。同時に、この手法で得られた結果をもとに、連携の問題点から改善点を取り上げ、実際の改善につなげていく方向性も探っていく予定である。

E. 結論

虐待・ネグレクトの早期発見・予防に寄与するため、地域の諸機関連携の現状と問題点を探り、改善するための手法として、「ステークホルダー分析」を導入し、2自治体に応用した。連携の現状と問題点をある程度示すことができ、今後の改善とより広い応用が期待できる。

H. 知的財産権の出願・登録状況（予定も含む）

1. 特許取得

該当なし

2. 実用新案登録

該当なし

3. その他

なし

研究成果の刊行に関する一覧表

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体の 編集者名	書籍名	出版社名	出版地	ページ	出版年
藤原武男		加藤則子 瀧本秀美 藤原武男 須藤紀子	子どもをとりまく 環境と食生活－妊 娠期からのすこや かな発育・発達のため	日本小児 医事出版	東京	印刷中	
藤原武男	総論	加藤則子 瀧本秀美 藤原武男 須藤紀子	子どもをとりまく 環境と食生活－妊 娠期からのすこや かな発育・発達のため	日本小児 医事出版	東京	印刷中	
藤原武男 児玉知子	各論 精神・神経発達	加藤則子 瀧本秀美 藤原武男 須藤紀子	子どもをとりまく 環境と食生活－妊 娠期からのすこや かな発育・発達のため	日本小児 医事出版	東京	印刷中	
藤原武男	その他の小児期特有 の疾患 喘息	加藤則子 瀧本秀美 藤原武男 須藤紀子	子どもをとりまく 環境と食生活－妊 娠期からのすこや かな発育・発達のため	日本小児 医事出版	東京	印刷中	
Andrew Pickles (藤原武男 訳)	統計に関する問題と 手法について臨床医 が知っておくべきこ と	Michael Rutter Dorothy Bishop Daniel Pine Steven Scott Jim S Stevenson Eric A. Taylor Anita Thapar 編、 長尾圭造 小野善郎 氏家武 吉田敬子監訳	児童青年精神医学 第5編(仮)	明石書店	東京	印刷中	

Barr RG <u>Fujiwara T</u>	Crying in Infants: Fussiness to Colic.	Rudolph CD Rudolph AM Hostetter MK Lister GE Siegel NJ (Eds),	Rudolph's Pediatrics, 22nd Edition,	McGraw- Hill	New York	in press	
Desapriy E Scime G Cripton P Babul S <u>Fujiwara T</u> Subzwari S Pike I	Misuse of child restraint seats: What can be done to reduce misuse of this life saving safety device?	Columbus F editor.	Consumer Product Safety	Nova publisher s	New York	In press	
市川光太郎	虐待	市川光太郎	小児科疾患アルゴ リズム	中山書店	東京	148-149	2009
市川光太郎	付表・児童虐待診断チ ェックリスト、児童虐 待トリアージシート、 SIDS 問診・診断チ ェックリスト	市川光太郎	小児科疾患アルゴ リズム	中山書店	東京	158-160	2009
市川光太郎	虐待に対して何がで きるか	白石裕子	救急外来における 子どもの看護と家 族ケア	中山書店	東京	173-195	2009
市川光太郎	児童虐待	市川光太郎	小児救急イニシャ ルマネージメント	中外医学 社	東京	417-426	2009
市川宏伸		市川宏伸 鈴木俊介	日常臨床で出会う 発達障害のみかた	中外医学 者	東京	全 266	2009
<u>市川宏伸</u> 内山登紀夫	発達障害の診断と治 療	市川宏伸 内山登紀夫	発達障害ケースブ ック	診断と治 療社	東京		2009
市川宏伸	発達障害の概念	市川宏伸 内山登紀夫	発達障害ケースブ ック	診断と治 療社	東京	3-4	2009
市川宏伸	発達障害と周囲の環 境	市川宏伸 内山登紀夫	発達障害ケースブ ック	診断と治 療社	東京	24-27	2009
市川宏伸	発達障害者支援法	齊藤万比古	子どもの心の診療 シリーズ1 子ども の心の診療入門	中山書店	東京	327-331	2009
田中康雄	小児・青年期の行動異 常	風祭 元	よくわかる精神科 薬ハンドブック	照林社	東京	183-189	2009

川俣智路	コミュニティ心理学・犯罪心理学	社会福祉学習双書編集委員会	社会福祉学習双書心理学 所収	全国社会福祉協議会	東京	202-203	2009
福間麻紀	地域連携 多職種連携	社会福祉学習双書編集委員会	社会福祉学習双書心理学 所収	全国社会福祉協議会	東京	203-207	2009
齊藤万比古	□.精神疾患についての説明 8.発達障害などの児童青年期の精神障害	林直樹	専門医のためのリュミエール9-精神科診療における説明とその根拠-	中山書店	東京	122-136	2009
牛島洋景 宇佐美政英 齊藤万比古	発達障害のうつ病	神庭重信 黒木俊秀	現代うつ病の臨床その多様な病態と自在な対処法	創元社	大阪	229-244	2009
齊藤万比古	注意欠陥多動性障害(ADHD) C.最近の話題として	市川宏伸 鈴木俊介	日常診療で出会う発達障害のみかた	中外医学者	東京	106-114	2009
齊藤万比古 磯野友厚	アスペルガー症候群の疫学	榊原洋一	アスペルガー症候群の子どもの発達理解と発達援助	ミネルヴァ書房	京都	8-19	2009
齊藤万比古		齊藤万比古	子どもの心の診療シリーズ1 子どもの心の診療入門	中山書店	東京		2009
齊藤万比古		齊藤万比古	発達障害が引き起こす二次障害のケアとサポート	学研	東京		2009
宮本信也	専門医の養成	市川宏伸 鈴木俊介	日常臨床で出会う発達障害のみかた	中外医学者	東京	225-236	2009
宮本信也	特別支援教育と医療・保健	宮本信也 石塚謙二 西牧謙吾 拓殖雅義 青木 健	特別支援教育の基礎	東京書籍	東京	243-249	2009
宮本信也	発達障害と不登校	東條吉邦 大六一志 丹野義彦	発達障害の臨床心理学	東京大学出版会	東京	243-254	2010
宮本信也	心身症としての心理社会的背景	田中英高	小児科臨床ピクシス 13 起立性調節障害	中山書店	東京	8-9	2010

石原栄子 庄司順一 田川悦子 横井茂夫			乳児保育（改訂 10 版）	南山堂	東京	全 229	2009
庄司順一	養育の理念と原則	全国乳児福祉協議会	新版乳児院養育指針	全国社会福祉協議会	東京	19-30	2009
庄司順一	子どもの発達	全国乳児福祉協議会	新版乳児院養育指針	全国社会福祉協議会	東京	73-85	2009
庄司順一	虐待への対応	全国乳児福祉協議会	新版乳児院養育指針	全国社会福祉協議会	東京	237-247	2009
庄司順一	乳児院の現状と課題	全国乳児福祉協議会	新版乳児院養育指針	全国社会福祉協議会	東京	271-277	2009
庄司順一		庄司順一	Q&A 里親養育を知るための基礎知識（第2版）	明石書店	東京	全 271	2009
庄司順一	子どもの病気、障害に対する反応	日本医療保育学会	医療保育テキスト	日本医療保育学会	東京	224-225	2009
庄司順一	児童虐待の定義と捉え方、子どもへの影響、虐待の実態について	日本医療保育学会	医療保育テキスト	日本医療保育学会	東京	228-231	2009
庄司順一	児童虐待の現状と課題	月刊福祉編集部	現代の社会福祉100の論点	全国社会福祉協議会	東京	134-135	2010
庄司順一	育児不安と私事化社会	月刊福祉編集部	現代の社会福祉100の論点	全国社会福祉協議会	東京	154-155	2010
杉山登志郎		杉山登志郎 岡南 小倉正義	ギフトド 天才の育て方	学研教育出版	東京	全 189	2009
杉山登志郎		杉山登志郎	講座 子どもの診療科	講談社	東京	全 230	2009
杉山登志郎		杉山登志郎	そだちの臨床 発達精神病理学の新天地	日本評論社	東京	全 259	2009

亀岡智美	ひきこもりに見られる課題	橋本和明	発達障害と思春期・青年期—生きにくさへの理解と支援—	明石書店	東京	195-215	2009
亀岡智美	きょうだいの生物学的基盤—双生児研究を中心に—	藤本 修	きょうだい—メンタルヘルスの観点から分析する—	ナカニシヤ出版	京都	16-23	2009
亀岡智美	乳児期・幼児期のきょうだい関係	藤本 修	きょうだい—メンタルヘルスの観点から分析する—	ナカニシヤ出版	京都	92-98	2009
亀岡智美	性的虐待	藤本 修	きょうだい—メンタルヘルスの観点から分析する—	ナカニシヤ出版	京都	134-140	2009
亀岡智美	被虐待体験と攻撃性	齊藤万比古 本間博彰 小野善郎	(子どもの心の診療シリーズ7) 子どもの攻撃性と破壊的行動障害	中山書店	東京	125-138	2009
亀岡智美	発達障がいをめぐる家族	橋本和明	発達障害との出会い	創元社	大阪	73-96	2009
亀岡智美	軽度発達障害	西村 健	メンタルヘルスへのアプローチ	ナカニシヤ出版	京都	128-138	2010
亀岡智美	境界性パーソナリティ障害と自己愛性パーソナリティ障害	西村 健	メンタルヘルスへのアプローチ	ナカニシヤ出版	京都	139-146	2010
田中英高	起立性調節障害	平岩幹男	小児の症候群	診断と治療社	東京	227	2009
田中英高		日本小児心身医学会	小児心身医学会ガイドライン集:日常診療に活かす4つのガイドライン	南江堂	東京	全 198	2009
田中英高		単著	起立性調節障害の子どもの正しい理解と対応	中央法規出版	東京	全 143	2009
田中英高	自律神経機能検査	齊藤万比古	子どもの心の診療入門	中山書店	東京	201-208	2009

田中英高	起立性調節障害(OD)とは	総編集 五十嵐隆 専門編集 田中英高	小児科臨床ピクシ ス 起立性調節障害	中山書店	東京	2-3	2009
田中英高	失神で受診した患者の鑑別診断	総編集 五十嵐隆 専門編集 田中英高	小児科臨床ピクシ ス 起立性調節障害	中山書店	東京	74-76	2009
田中英高	OD に対する全人医療とは	総編集 五十嵐隆 専門編集 田中英高	小児科臨床ピクシ ス 起立性調節障害	中山書店	東京	152-154	2009
足立英美 田中英高	OD に対する「メンタルアソシエーツ」の試み	総編集 五十嵐隆 専門編集 田中英高	小児科臨床ピクシ ス 起立性調節障害	中山書店	東京	155-157	2009

雑 誌

発表者氏名	論文タイトル名	発 表 誌 名	巻 名	ペ ー ジ	出版年
奥山眞紀子	いじめ介入の医療的支援 －被害児と加害児の治療 と和解のプロセス－	小児保健研究	68 (4)	420-424	2009
奥山眞紀子	幼児の性化行動 (sexualized behavior)	チャイルドヘルス	13 (3)	192-193	2010
藤原武男	新しい乳幼児揺さぶられ 症候群の予防戦略 「パー プルクライング期」教材に よる介入研究	子どもの虐待とネグレクト	印刷中		2010
Desapriya E <u>Fujiwara T</u> Verma P Pike I	Comparison of on-reserve road versus off-reserve road motor vehicle crashes in Saskatchewan, Canada: a case control study.	Asia-Pacific Journal of Public Health	in press		
<u>Fujiwara T</u> <u>Okuyama M</u> Takahashi K	Paternal involvement in childcare and unintentional injury of young children: a population-based cohort study in Japan.	Int J Epidemiol	in press		
Desapriya E <u>Fujiwara T</u> Scime G Sasges D Pike I Shimizu S	Did 1994 alcohol production and the sales deregulation policy in Japan increase the road traffic fatalities among adult and teenage males and females in Japan?	Japanese Journal of Alcohol Studies and Drug Dependence.	in press		
Chen G <u>Fujiwara T</u>	Impact of one-year methadone maintenance treatment in heroin users in Jiangsu Province, China	Substance Abuse: Research and Treatment.	3	61-70	2009
藤原武男	揺さぶられ症候群	月刊 地域保健	47 (7)	48-51	2009

藤原武男	お母さん、子どもは泣くのが「仕事」です。	潮	7月号(通号605)	226-231	2009
<u>Fujiwara T</u> , <u>Okuyama M</u> , Izumi M, Osada Y.	The impact of childhood abuse history and domestic violence on the mental health of women in Japan	Child Abuse & Neglect.	In press		
<u>Fujiwara T</u> , Kawachi I.	Is education causally related to better health? A twin fixed effects study in the United States	Int J Epidemiol.	38 (5)	1310-1322	2009
<u>Fujiwara T</u> , Barber C, Schaechter J, Hemenway D	Characteristics of Infant Homicide in the U.S.: Findings from a multi-reporting system	Pediatrics	124 (2)	e210-217	2009
Fujiwara T	Is Altruistic Behavior Associated with Major Depression Onset?	PLoS One	4 (2)	e5557	2009
<u>Fujiwara T</u> , Kawachi I	Response	Am J Prev Med	36 (2)	282	2009
Barr RG, Barr M, <u>Fujiwara T</u> , Conway J, Catherine N, Brant R,	Do educational materials change knowledge and behaviors regarding crying and shaken baby syndrome in mothers of newborns when delivered by public health home visitor nurses? A randomized controlled trial.	CMAJ	180 (7)	727-733	2009
<u>Fujiwara T</u> , Chan MH	The role of Behavioral Outreach Worker in increasing mental health service utilization for children.	Pediatr Int	51	167-168	2009
柳川敏彦 平尾恭子 加藤則子ら	児童虐待予防のためのペアレンティング・プログラムの評価に関する研究.	子どもの虐待とネグレクト	11 (1)	54-68	2009

山崎嘉久	脳神経外科医の子ども虐待への対応 -社会的責務と日常診療の中での役割	脳神経外科ジャーナル	18 (9)	650-655	2009
市川光太郎	人為的外傷・児童虐待、特集「子どもの救急～pitfallを招く、気になる症状を見逃さない～」	レジデント	2 (10)	102-108	2009
小林美智子	子ども虐待発生予防における母子保健のめざすもの	子どもの虐待とネグレクト	11 (3)	322-334	2009
山田不二子	乳幼児揺さぶられ症候群	小児科臨床	72 (増刊号)	201	2009
山田不二子	被虐待児症候群	小児科臨床	72 (増刊号)	202	2009
山田不二子	被虐待児症候群 (謝辞記載)	小児科	50 (8)	1305-1317	2009
山田不二子	子どもに対する性虐待の現状と初期対応 (謝辞記載)	日本医師会雑誌	138 (5)	900-904	2009
Yamada F	Abusive head trauma in infants and young children: a nationwide incident survey in Japan (謝辞記載)	Acta Paediatrica	Submitted		
市川宏伸	発達障害支援の展望	公衆衛生	73 (6)	429-432	2009
市川宏伸	発達障害支援法の現状と今後の展望 - 広汎性発達障害を中心に -	精神科治療学	24 (10)	1163-1169	2009
市川宏伸	通常学級で使える特別支援教育実践のコツ - 保護者からの“納得”を得るために -	児童心理臨時増刊号	63(18) (通号 906)	134-137	2009
市川宏伸	知っていますか？自閉症のこと	いきいき	155	73	2009
田中康雄	ADHDってなに？LDってなに？	こころの科学	145	12-16	2009
田中康雄	紡いでゆく連携 ネットワーキングからネットワークへ、	こころの科学	145	55-58	2009